



Title	アイヌ語獣名集
Author(s)	知里, 真志保
Citation	北海道大學文學部紀要, 7, 150-121
Issue Date	1959-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33244
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_PL150-121.pdf



アイヌ語獣名集

知里真志保

アイヌ語獣名集

知里真志保

§ 1 ネコ	§17 トガリネズミ
§ 2 オオヤマネコ	§18 コオモリ
§ 3 イヌ	§19 ウサギ
§ 4 オオカミ	§20 ネズミ
§ 5 キタキツネ	§21 リス
§ 6 エゾタヌキ	§22 シマリス
§ 7 エゾイタチ	§23 エゾモモンガ
§ 8 エゾテン	§24 シカ
§ 9 ラッコ	§25 トナカイ
§10 カワウソ	§26 ジャコオシカ
§11 クズリ	§27 ウシ
§12 クマ	§28 ウマ
§13 アザラシ	§29 イルカ
§14 セイウチ	§30 サカマタ
§15 トド	§31 クジラ
§16 オットセイ	

従来アイヌ語の獣名を取りあげて解説した文献はかなりあるのであるが、ただそこに取りあげられた獣名そのものの数はきわめて少く、しかもそれらの獣名や解説にはいろいろ疑わしい点もすくなくなかった。そこで、ここには筆者自身の臨地採集によるアイヌ語の獣名を、できるだけ多くの方言や位相にわたって記載し、語形・語義・語原などを明かにしようと試みた。そのさい、採集地その他について次のように略記した：

1) 地名。——《アショロ》十勝国足寄町。《アズマ》胆振国厚真村。《アブタ》胆振国虻田町。《イブリ》胆振国。《ウシヨロ》樺太西海岸北部鶴城。《オシャマンベ》胆振国長万部町。《オチホ》樺太東海岸南部落帆。《キタミ》北見国。《クシロ》釧路国。《クッシヤロ》釧路国弟子屈町字屈斜路。《サル》日高国沙流川筋。《シラオイ》胆振国白老町。《シラスカ》釧路国白糠町。《シラウラ》樺太東海岸白浦。《サマニ；シャマニ》日高国様似町。《シャリ》北見国斜里町。《タライカ》樺太東海岸北部多来加。《タラントマリ》樺太西海岸南部多蘭泊。《チカブミ》旭川市近文。《チトセ》石狩国千歳町。《テシオ》天塩国天塩川筋。《トカチ》十勝国。《ナヨロ》天塩国名寄町。《ニイトイ》樺太東海岸北部新間。《ビホロ》北見国美幌町。《ヒガシシズナイ》日高国静内町字東静内。《ホベツ》胆振国穂別村。《ホロベツ》胆振国幌別町。《ムカワ》胆振国鶴川町。《メムロ》十勝国芽室町。《レブン》胆振国豊浦町字礼文。《(H.)》北海道。《(S.)》樺太。《(K.)》北千島。

2) 文 献

Batchelor. — John Batchelor : AINU-ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY (1938, 岩波書店)

- Batchelor, AFS.——同：AINU-FIRESIDE STORIES (大正13, 教文館)
 Chiri, AMK, I.——知里真志保：アイヌ民俗研究資料第一 (昭11, アチックミュージアム)
 Chiri, AMK, II.——同：アイヌ民俗研究資料第二 (昭12, アチックミュージアム)
 Chiri, AMS.——同：アイヌ民謡集 (昭12, 郷土研究社)
 Kindaichi, KKI.——金田一京助：北蝦夷古謡遺篇 (大正12, 郷土研究社)
 Kindaichi, YNK.——同：ユーカラの研究二 (昭6, 東洋文庫)
 Kindaichi, AST.——同：アイヌ聖典 (大正12, 世界文庫刊行会)
 Nagata.——永田方正, 北海道蝦夷語地名解 (昭2, 北海道連合教育会)
 Pilsudski.——Blonislav Pilsudski: Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore (1912, CRACOW)
 Sarasina.——更科源蔵：コタン生物記 (昭17, 北方出版社)
 Torii.——鳥居龍蔵：千島アイヌ (明32, 吉川弘文館)
 Y. Chiri.——知里幸恵：アイヌ神謡集 (大正12, 郷土研究社)

3) その他. —E.=英語. Jap.=日本語. Russ.=ロシア語. 【雅】雅語.

§ 1. ネコ ; E. 'cat' ; *Felis ocreata var. domestica Brisson.*

- (1) mekó [*<Jap. 'neko'*] 《イブリ, ヒダカ》
 (2) méekot [meko の民衆語原解 ; '寒さで死ぬもの' ; *<me* (寒さ) *ekot* (で死ぬ)]
 《ハルトリ》
 (3) čape [*<Jap. (東北方言) 'čape' 'čappe'*] 《イブリ・ヒダカ》
 (4) kósika [*Russ. 'koška'*] 《S.——タラントマリ》

注. —チシマでもロシア語を借りてネコを 'kosuk' とよんだらしい ((Torii, p. 115)).

§ 2. オオヤマネコ, やまねこ ; E. 'lynx' ; *Lynx lynx borealis Thunberg.*

- (1) túkči 《タライカ》
 (2) tuxči [*<tukči*] 《シラウラ》

§ 3. イヌ ; E. 'dog' ; *Canis familiaris, var. japonicus Temminck.*

- (1) setá (H.;S.;K.)

注1. —北海道の北東部 (キタミ, クシロ, トカチ) では日常会話の言語は sita であるが, 雅語はやはり seta を用いる.

注2. —チシマでは次のように報告されている : a) 'seta' ((Torii, p.150)), b) 'shéta' ((*ibid.*, p.122))

注3. —KLAPROTH はカムチャツカのアイヌ語として 'stähpu' をあげている ((ASIA POLY-GLOTTA)). これは明かに setá-po (-poは指小辞) のなまりである.

注4. —この語は, これまでは, ただ '犬' とだけ訳されてきたが, くわしく見れば次のような, いろいろな用い方がある :

- a) 犬の総称として用いる.
 b) カラフトでは雄犬をさす. たとえば, seta 雄犬 (E. 'dog'), máx-seta 雌犬 (E. 'bitch' 'slut').
 c) カラフトのタライカでは4歳以上の雄犬をさす. たとえば,
 pósta 1歳の小犬
 irpa-čap 2歳の若い犬
 túpa-čap 3歳の若い犬
 setá 4歳以上の雄犬
 mát-seta, más-seta 4歳以上の雌犬

(2) sitá 《キタミ, クシロ, トカチ》

注1. —チシマでもこの形が用いられた。‘shita’ ((Torii, p. 120)).

注2. —日常会話の言語に sitá を用いる地方でも、古くは seta であつたらしく、地名や雅語の中ではその形を用いることがある。Cf. Nagata, p. 298.

(3) reyép [<reyé はう, -p もの; ‘はうもの’ (犬はあまえるとき地面をはいながら人間に近づくのでこの名がある)] ((H.)) 【雅】

注. —日常会話に用いれば、ていねいの意味があらわれ、kamuy (神) をそえて reyép-kamuy などともいわれる。

(4) rewép [<rewé はう, -p もの] 《アショロ》

注. —rewép-kamuy とも言われる。sitá と言うよりはていねいな言いかたである。次のように用いる: ókkay-rewép (=okkay-sita) 雄犬, húre-rewép (=hure-sita) 赤犬, kúnne-rewép (=kunne-sita) 黒犬, purúrke-rewép (=pururke-sita) むく犬, sirki-o-rewép (=sirki-o-sita) ぶち犬。

(5) apáčampe [<apá 戸, ča そば, un にいる, -pe もの; ‘戸口のそばにいるもの’] 《ビホロ, シラウラ》

(6) apá-cha-punki [<apá 戸口, cha そば, púnki 番人] 《ビホロ》

(7) apá-punki [<apá 戸口, púnki 番人] 《ビホロ》

(8) nimákitara [<nimáki その歯, tara あらわす; ‘歯をむきだすもの’] ((ホロベツ))

注. —「けだもの・ことば」とでも名づくべき特殊語。けだものたちは、犬を「セタ」と呼ばずに「ニマキタラ」すなわち「歯をむきだすもの」と呼んでこわがつている ((Y. chiri, p. 117, note 3))

(9) wóywoy [onomat.] 死んで神になれば ‘セタ’ といわずに ‘こう’ いう 《シラウラ, アイハマ》

(10) pósta [<póy-sita<póy-seta<pon-seta (小さい・犬)] 小イヌ ((H.; S.)); 1歳の小イヌ, まだ冬を越さぬ小イヌ (S.—タライカ)

(11) írpačap [<ir-pa-čiya-p (ひと・きせつ・冬を越した・もの)] 2歳のイヌ, 一冬を越したイヌ (タライカ)

(12) túpačap [<tu-pa-čiya-p (ふた・きせつ・冬を越した・もの)] 3歳のイヌ, ふた冬を越したイヌ (タライカ)

(13) čóčopo [<čóčo イヌを呼ぶ声, -po 指小辞] 小イヌ (チカブミ)

(14) pínne-seta [<pínne おすの] おすイヌ ((H.; S.; K.))

(15) mátne-seta [<mátne めすの] めすイヌ ((H.))

注. —北海道の北部 (チカブミ, キタミ, クシロなど) では mátne は、ふつうには [‘matne] と発音されるが、まれに [‘maxne] あるいは [‘mačne] と発音される。

(16) máx-seta [<mat-seta おんな・イヌ] めすイヌ (シラウラ, ウショロ)

(17) más-seta [<max-seta<mat-seta (おんな・イヌ)] めすイヌ (シラウラ, ニイトイ, タライカ)

(18) máxne-seta [<matne-seta (めすの・イヌ)] めすイヌ (タラントマリ, マオカ)

注. —maxne は、ふつうには [‘maxne] と発音されるが、まれに [‘mačne] または [‘majne] とも発音される。

(19) mánne-seta [<maxne-seta<matne-seta (めすの・イヌ)] めすイヌ (タラントマリ・マオカ)

注. —Cf. ‘manne shéta’ ((K.— Torii, p. 122))

- (20) áxkox-seta おすイヌ 《アイハマ・シラウラ》
注。——特殊語。tu-itax と称する昔話の中で使う。
- (21) otúyu めすイヌ 《アイハマ・シラウラ》
注。——特殊語。tu-itax と称する昔話の中で使う。
- (22) húra-seta [‘赤い・イヌ’；<hure 赤い] あかイヌ、茶色の犬 ((H.))
注。——カラフトでは huré-seta のようにアクセントがちがう 《シラウラ》。
- (23) kúnne-seta [‘くろい・イヌ’；<kunne くろい] くろイヌ ((H.))
注。——カラフトでは kurásno-seta, または kuráčno-seta とゆう。kurásno, kuráčno=kunne.
- (24) retár-seta [‘白い・イヌ’；<retár 白い] 白イヌ ((H.))
注。——カラフトでは retára-seta, または tetára-seta.
- (25) késo-seta [‘まだらのある・イヌ’；<kes 斑紋, o ついている] ぶちイヌ ((H.))
- (26) maná-us-seta [‘灰ほこりの・ついている・イヌ’；<maná 灰ほこり, us ついている] 灰色のイヌ ((H.))
- (27) túnro-seta [‘虎ふのある・イヌ’；<túnro とらふのある] とらイヌ ((H.))
- (28) hepúr-seta [‘むく毛のある・イヌ’；<hepúr むく毛ある] むくイヌ ((H.))
- (29) tusíko-seta [‘ふたつ目のあるイヌ’；<tu ふたつ, sik 目, o ついている] 左右の目の上に一箇づつ星の模様のついているイヌ, いわゆる ‘四つ目の犬’ ((H.))
- (30) hečimi-o-seta [‘頭髮をまん中から分けた犬’；<hečimi ‘髪をまん中から分ける’ ‘まん中から分けた髪’, o ついている] 前額部にあたかも頭髮を分けたような模様のついているイヌ ((H.))
- (31) otúy-seta [‘尾のきれた犬’；<o 尻, tuy きれる] ‘尾がちぎれたように短い犬, または ‘尾のまったく無い犬’ ((H.))
注。——こうゆうイヌは, あまりとおとばれない。だから, ごくくだらな人間をたとえて「オドイペ」(o-tuy-pe 尾のきれた・奴) という ((Cf. Y. Chiri, p. 14, note 9)). 口承文芸の中に次のような悪口の定句がでくる:
ačikara-ta いまいましいな
ayakanna-ta にくらしいな
a-wen-(mači) おらが (かかあ) の a-otuy-ike! ばかやろーめ!
この「オドイケ」(o-tuy-ike 尾の・きれた・の) も, 「オドイペ」と同じく, ‘つまらない奴’ ‘下等な奴’ の意味で, もとは「オドイ・セタ」すなわち ‘尾の無い犬’ をさした語である。
- (32) táytay-seta ぶちイヌ 《シラウラ・アイハマ》
- (33) hóxčiri-koro-seta [‘ホ・チリを・もっている・イヌ’；<hóxčiri (→下注), koro (もっている)] 前額部に三角形の模様のある犬 ((S.))
注。——カラフトでは男児は3, 4歳から13, 4歳の頃まで前髪に hóxčiri とゆうものを結び下げる。それは三角形の小布に青玉などをいっぱい縫いつけた美しい髪飾りである。その子が初めて鳥を射落した時は, この髪飾りを取り去るのであり, そうなって初めて一人前の顔ができるのである。鳥を射当てることができなければいつまでもそれをぶら下げていなければならない, それをぶら下げている限りは, いつまでも肩身のせまい思いをしなければならないので, どの子も弓矢のけいこには, しんけんになるのである。
- (34) mǐntar-us-kur [<mintar (庭) us (においでになる) kur (神)] 《ビホロ》【雅】
- (35) sitá-kosumpu [<sita (犬) kosumpu (ばけもの)] ぶち犬 《ビホロ》
注。——késo-seta のこと。こうゆう犬は不吉だとしてきらわれる。
- (36) ók-kari-kesoma-sita [<ok (えりくび) kári (のまわりに) késoma (斑紋のあ

る) seta (犬) 〕 首のまわりに白い輪の模様のついている犬 (ビホロ)

注。——こんなのも不吉だとされる。

(37) móxku [むく犬の‘むく’か] 犬 (シラウラ) 【雅】

(38) enánnumaus-sita [＜e-nan-numa-us-sita (上端の・顔・毛・だらけの・犬) 顔の上半面の黒い犬 (ビホロ)]

注。——wénkamuy-sita (悪魔・犬) とも言い、獲物を見てもかかって行かぬからこうゆう犬は飼うものではないとされている。

(39) pá-ikiri-kor-sita [＜pa (頭) ikiri (の線を) kor (もつ) seta (犬) 〕 頭髮を分けたように頭のまん中に白い筋のついている犬 (これは別に凶相ではない) (ビホロ)]

(40) parúmpe-kúnne-turkes-o-sita [＜(舌に・黒い・ほくろ・ある・犬) 〕 舌に黒い点々のついている犬 (こうゆう相の犬は良犬とされている) (ビホロ)]

(41) parúmpe-etukka-sita [‘舌を・つき出している・犬’] こうゆうのは不良犬とされている (ビホロ)]

(42) ekitruoma-seta [＜e-kip-ru-oma-seta (その・額に・縞が・ついている・犬) 〕 額の所まで鼻すじの通っている犬 (ナヨロ)]

(43) etú-retar-seta [‘鼻・白い・犬’] (ナヨロ)]

(44) etú-kunne-seta [‘鼻・黒い・犬’] (ナヨロ)]

注。——こうゆうのは良犬とされている。

§7.4. オオカミ; E. ‘wolf’; Canis lupus lupus L.

(1) hórkew (イブリ, ヒダカ, ソラチ, イシカリ, テシオ, タライカ)

注1。——この語は北海道のどの部落でも通じる。日常語としては別の語を使う所でも、雅語として老人はこの語を知っている。多く hórkew-kamuy (狼・神) とゆうように、kamuy (神) をつけてよぶ。

注2。——日本人は「ホルケウ」「ホロケウ」「ホリケウ」などと書く。

(2) órkew 【雅】 (アショロ, ビホロ)

注1。——orkew-kamuy (狼神) というように、kamuy (神) をつけてよぶことが多い。

注2。——クラシェニニコフに orgiou “loup” とある。

(3) horókew (マオカ, シラウラ, オチホ, ニイトイ)

注。——ニイトイでは hórkew とゆうアクセントも耳にした。horókew-kamuy, hórkew-kamuy とゆうように kamuy をつけてよぶことが多い。

(4) ónrupus-kamuy [狩をする・神] (ビホロ, クッチャロ, ハルトリ, シラヌカ, フシコ)]

注1。——これらの地方でも雅語では horkew-kamuy, órkew-kamuy の形を用いる。

注2。——日本人は「オンルプシカムイ」「オンルプシカムイ」と書く。

(5) wóse-kamuy [＜wo (onomat.) イヌまたはオオカミのほえごえ, wó-se ウォーとほえる, kamuy 神] (H. — 各地; S. — オチホ) 【雅】

注1。——イシカリ国カミカワ郡に「セタウンナイ」(Seta-un-nay ‘イヌ・いる・沢’) とゆう地名があり、ナガタ・ホオセイ氏は“此セタハ犬ニアラズ「ウォーセカムイ」狼ヲ云フ”として「狼ノ子ヲ生ミシ処」とゆう解釈を与えている (Nagata, p. 53).

注2。——キタミ国モンベツ郡に「オオセウシ」(Wóseusi ‘ウォーとほえる所’) とゆう地名があり、ナガタ・ホオセイ氏はこれを「狼多キ処」と解釈し、「狼出デ夥シク鹿ヲ食ヒシ処ナリシガ今ヤ鹿尽キテ狼モ亦ナシ」と書きそえている (Nagata, p. 456).

注3.—「wóse-kamuy と hórkeu とはちがう。wóse-kamuy はオオカミでなくてヤマイヌだ」と主張する老人たちが、シラオイやホロベツには多い。それらの人々によれば、むかしこの北海道にはオオカミのほかにはヤマイヌもいたとゆうのである。それが *Canis hodophylax Tem.* であったかどうかはさておき、もとのあたりの野山には野性化した犬が群をなして住んでいて、それをアイヌは kimuy-seta ['山のイヌ'; <kim 山, un にいる, seta 犬>と呼んで、seta すなわち飼いいヌと区別していた。wose-kamuy はこの kimuy-seta をもさして云ったものらしい。

(6) poyóp 《ワダムラ・シズナイ》

注1.—「和田村誌」(イトオ・ハツタロオ執筆。1938年。ネムロ国ネムロ郡ワダ村役場発行) 11ページに「ポヨブ(狼)」とある。

注2.—ヒダカ国シズナイ郡に「ポヨブ」という地名があって、ナガタ・ホオセイ氏はこれに“poiyoop or hoiyoop”とローマ字をあて、オオカミの意味にとり、『コノアタリ狼多シ。故ニ名ズク。「ホヨブ」ハ凶害ヲナス者ノ義』ト注シテイル (Nagata, p. 254)。

(7) nupúripaunkur [<nupuri 山, pa かみて, un にいる, -kur 神; ‘山のかみてに住む神’] オオカミの神としての名 《イブリ・ヒダカ》

(8) nupuripakorkamuy [<nupuri-pa-kor-kamuy (山の・かみてを・支配する・神)] オオカミの神としての名 《ホロベツ》

§ 5. キタキツネ, きつね; *E. fox*; *Vulpes vulpes schrencki Kishida*.

(1) čirónnup [<čir- 我々が, ronnu どつさり殺す, -p もの; ‘我々がどつさり殺すもの’ ‘えもの’ ‘けだもの’] 《イブリ・ヒダカ・クシロ (シラヌカ)・トカチ・その他, 日常語としては用いなくとも, 文芸語として用いる部落は方々にある。例えばチカブミ・クッチャロなど。Cf. ‘kem-čirónnup’ ‘血のような色をしたキツネ’ (クッチャロ: Sarašina, p. 118). ‘čirónnup-kotan’ ‘キツネ・村’ (クシロにある地名: Nagata, p. 329).)

注.—この語は、今一般にキツネをさすが、もとはもっと意味がひろく、村のうしろの野山でどつさり取れたケダモノ類、——キツネばかりでなく、エゾタヌキや、エゾテンや、エゾイタチや、ウサギや、カワウソや、シマリスなどをもさし、またイルカをもさしたらしい。語原がそれを示しているし、次のような合成語の中にももとの意味が残っている：

(a) ruó-čirónnup < ru ‘縞’ + o ‘ついている’ + č. ; ‘縞のついているケダモノ’ すなわち ‘シマリス’

(b) wórun-čirónnup < wor ‘水’ + un ‘にいる’ + č. ; ‘水にいるケダモノ’ すなわち ‘カワウソ’

(c) pón-čirónnup < pon ‘小さい’ + č. ; ‘小さいケダモノ’ すなわち ‘エゾテン’

(d) upás-čirónnup < upás ‘雪’ + č. ; ‘冬になると雪のように白くなるケダモノ’ すなわち ‘エゾイタチ’

(e) moyuk-čirónnup < moyuk ‘エゾタヌキ’ + č. ; ‘エゾタヌキであるところのケダモノ’ すなわち ‘エゾタヌキ’ (レブン)。単に čirónnup とだけ云ってエゾタヌキをさした例もある。キタミ国モンベツ郡に「チロンヌブセトシナイ」(čirónnup-set-us-nay ‘ケダモノの・おりの・ある・沢’) という地名があり、ナガタ・ホオセイ氏は「貉欄ノ沢」と解釈し、「古エ老嫗アリ貉ヲ欄ニニ畜ヒシ処ナリトアイヌ云ウ」と注している ((Nagata, p. 456))

(f) hurép-čirónnup < hurep ‘キツネ’ + č. ; ‘キツネであるところのケダモノ’ すなわち ‘キツネ’ (レブン)

(g) térke-čirónnup ‘はねる・えもの’ すなわち ‘イルカ’ (『もしおぐさ』)

(h) retát-čirónnup ‘白い・えもの’ すなわち ‘ウサギ’ (クッチャロ)

(2) sumári 《H.—デシオ・チカブミ; S.—全地域》

注1.—‘sumare’ ‘狐’ ‘kunne-sumari’ ‘黒狐’ 《ウエハラ・ユウジロオ: 『もしおぐさ』》

注2.—huré-sumari 「赤いキツネ」; kunne-sumari または kurásno-sumari 「くろいキツネ」(シラウラ)

注3.—この語は、昔はかなりひろい範囲に用いられていたのではなからうか? 地名がそれを思わせる。北海道の西南部の地方にも次のような地名が残っている:

- (a) イブリ国ヤマコシ郡: 「シュマリプィウシ」(Sumari-puy-usi ‘キツネの・穴が・たくさんある・所’)
- (b) ヒダカ国サル郡: 「シュマリウコッ」(Sumari-ukot ‘キツネ・交尾する’)
- (c) シリベシ国シマコマキ郡: 「シュマリプィ」(Sumari-puy ‘キツネ・穴’)
- (d) イシカリ国ウリウ郡: 「シュマリナィ」(Sumari-nay ‘キツネ・沢’)

注4.—イブリ国ホロベツの老人たちは、キツネの大将の本当の名として sumári-sama 或いは sumári-sapa とゆう語を記憶している。

- (3) kimótpe [< kim 山, ot たくさんいる, -pe もの; ‘山にたくさん住んでいるケダモノ’] (クッチャロ)

注1.—この語は、いま次の二つの意味に用いる:

- (a) 海のケダモノに対して山のケダモノをさす。すなわち
 - { kimótpe ((H.)), kimóxpe ((S.)) 山のケダモノ
 - { repótpe ((H.)), repóxpe ((S.)) 海のケダモノ
- (b) 山のケダモノの中でも特にキツネをさす。

注2.—北海道のイブリおよびヒダカのサル地方の叙事詩の中で、夏のキツネを sák-kimotpe と云っている。Cf. Kindaichi, YNK, pp. 368, 836.

注3.—Kraproth の “Asia polyglotta” S. 306 に Kamčatka のアイヌ語として ‘kýmōthpeh’ をあげている。

- (4) húrep [< hurep 赤い, -p もの; ‘赤いケダモノ’] (レブン) cf. 「フーレツプ」((もしおぐさ))。

- (5) húrep-čironnup [→(1)注(f)] (レブン)

- (6) sitúmpe [< sitú ‘山’, un ‘にいたる’, -pe ‘もの’; ‘山にいたるもの’] (H.—全地域; S.—タラントマリ)

注。この語はキツネに対する敬称である。キツネの中でも、アイヌにもっとも貴ばれるのは、クロキツネなので、この語を特にクロキツネの意味に用いることが多い (cf. Y. chiri, 46, 注4. 『もしおぐさ』: くろキツネ, 「シトンビ」)。くろキツネを、ふつうには「クンネ・シドンペ」と云う。

- (7) páykarmatampe [< paykar 春, matun (交配する?), -pe もの] 春のキツネ (ホロベツ)

- (8) sákkimotpe [sak 夏, kimótpe 山のケダモノ] (イブリ・ヒダカ)

注。—Cf. (3), 注1, 2, 3.

- (9) kemákosnekur [‘足の軽い神さま’; < kemá (足) kósne (かるい) -kur (神)] キツネの神としての名 ((H.))

- (10) kemátunaskur [‘足の早い神さま’; < kemá (あし) tunas (はやい) -kur (神)] = kemákosnekur ((H.))

- (11) sekúma-sarkes-wa-ača-ne-kamuy [‘山の・はし・で・長老・になつてゐる・神’] キツネ神の首領 ((S.)) 【雅: Piludski, p. 214】

- (12) sikúma-kes-un-kamuy [‘山・はし・の・神’] ((S.)) 【雅: Kindaichi, KKI, p. 146】

- (13) ké(y)sasi-koro-kamuy [< keysasi(?) koro (もつ) kamuy (神)] キツネの神名

((S.)) 【雅: Kindaichi, KKI, pp. 12, 113】

- (14) čawčaw [<čaw キツネの鳴声, =北海道 paw] チシマキツネ (*Vulpes anadyrensis splendidissimus Kishida*)

§ 6. エゾタヌキ, むじな, たぬき; E. 'raccoon-dog'; *Nyctereutes albus. Beard*

- (1) moyúk [<mo 'ちいさな' yuk 'えもの' (→§ 12 (2) 注)] ((H.))

注1. — moyuk-čironnup と云った (レブン. →§ 5, (1), 注1, (e).)

注2. — ただ čironnup とだけ云った例もある (キタミ. →Nagata, p. 456.)

- (2) suké-moyuk [<suké めしたきする, moyúk むじな] エゾタヌキの中で, とくに顔の黒いのをさして云う. クマのために 'めしたき' するからよごれるのだとゆう (cf. Batchelor, AFS, p. 30 f.)

§ 7. エゾイタチ; E. 'ermine' 'stoat'; *Mustela erminea kanei (Baird)*

- (1) upás-čironnup [<upás 雪, čirónnup けもの; エゾイタチは冬になると毛が雪のように白くなるので '雪・けもの' の名があるのであろう. →§ 5, (1), 注1, (d)] (イブリ・ヒダカ・チカブミ)

注. — バチラーは Upas chironnup, "ermine" (*lit*: snow fox) (*Vid. Batchelor, Dictionary, p. 88, "chionnup"*) と書いている. 「チロンヌプ」とゆう語が今は一般にキツネをさすので, 「ウパシ・チロンヌプ」を単純に '雪・キツネ' の意味にとったのである.

- (2) sáčiri ((H. — アバシリ・ハルトリ・アッケシ: S. — タラントマリ・マオカ))

注1. — たつとんで sačiri-kamuy と云う. また poy-sačiri-kamuy [<pon-sačiri-kamuy] と云う所もある (クッチャロ — Sarasina p. 124). この方はおそらくコエゾイタチをさすのであろう.

注2. — バチラーは, なお次の数語をあげている:

- (a) 'tanne-eremu' エゾイタチ. *An ermine or stoat. Mustela erminea L.*
- (b) 'yuk-eremu'. エゾイタチ. *Ermine.*
- (c) 'kurusurap'. イタチ. *A weasel. Mustela itatse Tem. (Including Mustela vulgaris Briss.)*
- (d) 'eremu-koikip'. イタチ. *A weasel.*

注3. — コエゾイタチ (*Mustela rixosa namiyei Kuroda*) をも同じ名称で呼んだらしい.

§ 8. エゾテン, てん; E. 'marten'; *Martes zibellina brachyura (Temminck)*

- (1) hoínu ((H. — ホロベツ, ホベツ, シヤマニ: S. — ニイトイ, タライカ))

注. — カラフトでは, カラフトクロテン (*Martes zibellina sachalinensis*) をさす.

- (2) hóynu ((H. — レブン, チトセ, チカブミ: S. — シラウラ))

- (3) ónu (ビホロ, クッシャロ, アシヨロ)

- (4) kasúpekira [<kasúp (杓子) e (をもって) kirá (逃げる)] (ビホロ, クッシャロ, アシヨロ, シラスカ, ハルトリ)

注. — 'しゃもじを持つて逃げるもの' などとゆう奇妙な名がどうしてついたのか. この動物は, むかし, よくアイヌの家に忍びこんで, いろいろな物を盗んでにげた. もしそんなところを人に見つかりと, あべこべに, とがめだてするかのように, 齒をむきだしていがむので, ikka-ka-o-niwen-hoynu [盗んだ・上・に・いがむ・テン] とゆう名まであった. そうゆう習性がある上に, この動物は山の神 (クマ) の料理人だとう信仰があるので, アイヌの家に忍びこんで, 料理に使うしゃもじお盗んでにげるものとゆうあだ名がついたのであろう.

- (5) kasípekira [<kasupekira] (ビホロ)

- (6) káspekira [<kasipekira] (ナヨロ)

(7) pón-čironnup [<pon (小さい) čironnup (けだもの)] 《クッシャロ》

補註1. —shuke-hoinu (めしたきする・テン) とゆうのがあり、エゾテンの中で、とくに顔の黒いのをさすとう。山の神であるクマのために飯たきをするから顔がよごれるのだとう (Cf. Batchelor, AFS, p. 30 f.).

補註2. —Kracheninnikof はテンをあらわす千島アイヌ語として Tannerum をあげている (Torii, *Les Ainou des Iles Kouriles*, p. 71). tanne (長い) erum (ネズミ) の約であろうか。

§ 9. ラッコ ; E. 'sea-otter' ; *Enhydra lutris* (L.)

(1) atúy-esaman [<atúy (海) esaman (カワウソ)] 《シラオイ, ビホロ》

(2) rákko ((H.:K.))

参考. —a) 'rakko' (Torii, p. 150), b) 'rakko' (Klaproth, p. 312).

(3) ráxku 《S. — オチホ》

参考. —'raku' (S.-Klaproth, p. 312).

補註1. —ビホロの古老、菊地儀之助翁の言によれば、ラッコのことを、ふだんは atuy-esaman と言うのだが、その語は夜間に使ってはいけなかったことになっていた。夜間にその語を口にするとかワウソがばけて出てくるからとうの。それで、夜は atuy-esaman と言わずに、もっぱら rakko とよび、いまではそれが一般に通用するようになってしまつたのだとう。

補註2. —以上のほかにも、性の区別や成長の各段階に応じる特称がいろいろあつたらしく、例えばモシオグサは「ホブシツツベ」、「ヌマツイベ」、「ピンネツツ」(pinne-p 雄の・もの)、「マツネツツ」(mátne-p 雌の・もの)、「アツウ ツルツ(子)」、「ラップ(子)」、「マトイベ(子)」、「ボンシツツテ(子)」などの名をあげ、また Klaproth の *Asia polyglotta* にもカムチャツカ方言として kotōhnæp なる名称をあげている。

§ 10. カワウソ ; E. 'otter' ; *Lutra lutar lutar* (L.)

(1) esáman ((H.:S.))

注. —この語の語原について、たしかなことは分らないが、ひょっとしたら満州語の saman と関係があるかもしれない。カラフトのアイヌは、その北方の隣人であるギリヤーク・オロック・ツングースなどからシャーマン教 (E. shamanism) をとりいれて、それを sáman と言っている (Cf. K. Kindaichi, *AINU NO KENKYŪ*, 2nd ed., 1940, p. 33 f.) この語は古く北海道でも使はれたらしく、カワウソの頭骨を以てするト占を esámanki と言った (Cf. Batchelor, *Dictionary* p. 130). この語の語原は、たぶん e-sáman-ki 「それで・サマンを・する」であつたと思われるが、saman の意味が忘れられるに従つて、民間語原はそれを esáman-ki 「エサマンを・する」と分析し、このト占にはカワウソの頭骨が多く用いられたので、esáman がカワウソの意味になったのではなからうか。カワウソの頭を食うと放心状態になって物忘れするとか、カワウソは健忘であるとかいう信仰のあるのも、やはりシャーマン教に関係があるのではなからうか。

(2) wórun-čironnup [<wor (水) un (に) いる) čironnup (けもの)] 《レブン》

(3) wórus-čironnup [<wor (水) us (に) たくさんいる) čironnup (けもの)] 《ビホロ》

(4) hórus-čironnup [<hor (水) us (に) たくさんいる) čironnup (けもの)] 《クッシャロ》

注1. —ある人はこれを「ホロシチロンノッ」と書いて「湿潤に住む狐類」の意にとっている (Sarasina, p. 121).

注2. —バチラーの辞書は woro-chironnup の形をあげている。やはり「水・にたくさんいる・けだもの」の意だ。

(5) sapá-kapke-kur [<sapá (頭) kápke (は) げている) kur (神)] 《チトセ》

参考。——カワウソに対する悪口に *sapá-kaptek* (‘頭・ひらぺったい’) とゆう語がある (Y. Chiri, p. 116).

(6) *pétniru* [<*pet-ninu* (川を・縫う) ?] (《ビホロ》) 【夜ことば】

注。——*esáman* とゆう語を夜間に使ってはいけない。もし使うとカワウソが何かにばけて出てくる。それで夜間にカワウソについて何か言うときは *petniru* とゆう語を使った。

§11. クズリ ; E. ‘*glutton*’ ; *Gulo gulo* (L.).

(1) *kučiri* (S.——シラウラ, オチホ)

注。——この動物は木の上において、下を通る人に小便をかけるとゆう。その小便が目に入ると目がつぶれるとゆうアイヌは恐れている。*kučiri* とは小便の意だ。

§12. くま : E. ‘*bear*’.——北海道にはヒグマ (*Ursus arctos yesoensis*) が住み、カラフトにはアカグマ (*Ursus arctos collaris*) が住む。

(1) *kamúy* [もと‘神’の義] (H.: K.)

注。——北海道では「カムイ」(神)とだけいってクマをさす。「キムンカムイ」(山の神) [→(6)] のつもりだ。チシマでもそうだったらしい (→‘*kámúy*’ [Klaproth, S. 304] ; ‘*kim’kamui*’ [Torii, p. 150]). カラフトではクマを「イそ」と言うが、これはチシマでアザラシをいい、北海道で「えもの」いっばんをいう語である [→(45)]。カラフトでただ「カムイ」といえば、東海岸ではアザラシをさし [→§13(3)], 西海岸ではトドをさす [→§15, (2)]. Cf. also: 「カムイ・ハル」‘クマの肉’, 「カムイ・チコイキブ」‘クマなるケダモノ’ [→(2)], 「エン・カムイ」‘あらグマ’ [→(18)], 「シけ・カムイ」‘ふとった大きなクマ’ [→(19)] 「オトットウシ・カムイ」‘ちぶさのついた・神(めグマ)’ 「スヨ・カムイ」‘穴に入っている・クマ’

(2) *kamúy-čikoyip* [<*kamúy* (神, クマ), *čikóykip* (えもの, けもの) : <*či-* (われらが) *kóyki* (とる) -*p* (もの)] (H.) 【雅】

注——叙事詩の中で “*kamuy-čikoyip yuk-čikoyip*” 「クマなるケダモノ・シカなるケダモノ」のように対句にして用いることが多い。この *yuk-čikoyip* の *yuk* は、いま、単独では、もっぱらシカの意に用いられるが、古くはもっと意味がひろく、ケダモノの中でも狩の対象としてまたその肉が食料として特に重要であったクマ・シカ・エゾタヌキ等のどれをもさす名称であったらしい。語原はたぶん *yuk* < *i-yuk* 「もの・とる」 「とり・もの」 「え・もの」の義で、クマを「チラマンテブ」 [<*či-ramante-p* (われらが・狩りとる・もの)] [→(20)] といい、キツネを「チロンヌブ」 [<*či-ronnu-p* (われらが・どっさりころす・もの)] [→§5, (1), 注1] といい、ケダモノを「チコイキブ」 [<*či-koyki-p* (われらが・ころす・もの)] というのと同じく、狩人の立場から名づけたものである。もともと「えもの」の意味だったからこそ、それがクマにもシカにもエゾタヌキにも適用されたのである。Cf. 「モユク」 [<*mo-yuk* (小さな・えもの)] ‘エゾタヌキ’ [→§6] 「シユク」 [<*si-yuk* 大きな (ほんとの) ・えもの] ‘雄グマ’ [→(21)], 「ホクユク」 [<*hoku-yuk* (おとこ (おと) ・えもの)] ‘雄グマ’ [→(23)], 「ノユク」 [<*no-yuk* (よい・えもの)] ‘おとなしいクマ’ [→(34)], 「エイユク」 [*weyyuk* < *wen-yuk* (わるい・クマ)] ‘あらグマ’ [→(35)], 「ユクサパオニ」 [<*yuk-sapa-o-ni* (クマ・あたま・のる・木)] など。

(3) *kamúy-čáča* [<*kamúy* (神) *čáča* (ちじい)] (《クッシャロ, ビロオ》)

注——説話の中ではクマをちじいとしてあらわすことが多い。Cf. 「カムイ・エカシ」[神・ちじい] [→(4)]; 「キムン・エカシ」[山の・ちじい] [→(5)]

(4) *kamúy-ekasi* [<*kamúy* (神) *ekasi* (ちじい)] (《ヨイチ》) Cf. (3), 注。

(5) *kimún-ekasi* [(山のちじい) ; <*kim* (山) *un* (に) *ekási* (ちじい)] 説話の中でクマを言う(ホロベツ) Cf. (3), 注。 Cf. also, M. Chiri, AMS., p. 109, 注 (1).

- (6) kimún-kamuy [‘山の神’; <kim (山) un (にいる) kamúy (神)] クマを神としてあがめる名 (H.: S.—タラントマリ)

注1.—この語は、a) いっぱんにクマをさす; b) クマのうち、とくに noyuk ‘おとなしいクマ’ をさす。

注2.—カラフトでは、ひろく ‘山のけだもの’ をさすことがある (Y. Yamabe, Ainu Monogatari, p. 67).

- (7) ‘kim’kamui’ ((K.)) Cf. (1), 注; (12), 注2.

- (8) kimúmpe [<kim (山) un (にいる) -pe (もの)] (H.: S.)

注.—この語は、a) 山のけだものをさす; b) クマをさす (Kindaichi, YNK., p. 431; Pilsudski, p. 167).

- (9) metótus-kamuy [‘山のおくにいる神’; <metót (おく山) us (におられる) kamuy (神)] (H.)

注.—北海道の南部地方イブリヤヒダカでは、この語は *archaic* で *liturgical* で、主として祈りのことばに用いられる。

- (10) metótos-kamuy [<metot-us-kamuy] (ビホロ)

- (11) metót-kamuy (ハルトリ)

- (12) nupúri-kamuy [‘山を支配する神’; <nupúri (山) kor (もつ) kamúy (神)] (H.)

注1.—クマ神のかしらを言い、主として説話に用いられる。

注2.—かんたんに nupuri-kamuy とも言う (ビホロ)。こうゆう合成語の神名には、たいてい *syntactic* なものと *asyntactic* なものがあり、前者はあらたまったいいかたで、後のはぞんざいなくいいかたである。

(<i>syntactic</i>)	(<i>asyntactic</i>)
kim-un-kamuy	kim-kamuy
metot-us-kamuy	metot-kamuy
mupuri-kor-kamuy	nupuri-kamuy

注3.—アイヌは、クマを、その性質に関して二種類に分ける。黒つばい毛色のものは、おとなしいよい性質のクマで、それを「ノユク」[よい・クマ] [→(36)] とよび、また「キムンカムイ」[山・にいる・神] [→(6)] とよぶ。これらは山のまん中に住むと考え、そのかしらを「ヌプリ・ノシキ・ウン・カムイ」[山・のまん中・にいる神] [→(14)], 「ヌプリ・ノシキ・ウン・クル」[山・のまん中・にいる・神] [→(15)], 「ヌプリ・コル・カムイ」[山を・もつ・神], 「ヌプリ・コル・クル」[山を・もつ・神]、或いは kamuy-netopa [神の・胴体] とよぶ。また毛色のかわつた、腰から上がかっ色で腰から下が灰色とゆうようなのは、性のわるい、人に害をするクマで、「エィユク」[わるいクマ] [→(37)] とよばれ、その住居は山のしもてにあると考えられて「ヌプリケスンカムイ」[山・のしもて・にいる・神] [→(16)] または「ヌプリケスンクル」[山の・しもて・にいる・神] とよばれる。

- (13) nupúri-kamuy →(12), 注2.

- (14) nupúri-noski-un-kamuy [<nupúri (山) nóski (まん中) un (にいる) kamúy (神)] (H.) →(12), 注3.

- (15) nupúri-noski-un-kur →(12), 注3.

- (16) nupúri-kes-un-kamuy [<nupúri (山) kes (しもて) un (にいる) kamuy (神)] (H.) ‘あらぐま’ (方言 ‘ひぐま’) の神名 →(12), 注3.

- (17) nupúri-kes-un-kur →(12), 注3.

- (18) wén-kamuy [‘わるい・神’ ‘あらぐま’ ‘人くいグマ’ (ビホロ)]

注1.—wén-kamuy=wéyyuk[→(37)]=nupuri-kesun-kamuy [→(12), 注3.]

注2.—アシヨロでは、初雪が来ても穴に入らずにうろついているクマ。

- (19) siké-kamuy [＜siké (荷物を背負う) kamuy (神)] ふとったクマ (クッシャロ)

注.—アイヌの信仰によれば、クマの肉体はクマの神のおくりもの——クマの神が人間を訪れる際のみ^みや^げけなのである。そこで、ふとった大きなクマは、アイヌの目には、み^みや^げの荷物をどっさり背負った神さまとして映じるのだ。

- (20) čirámantep [＜čī- (われら) ramánte (狩りとる) -p (もの)] ((H.: K.—Torii, p. 150))

注.—この語はa) えもの、b) けだもの、c) クマ、の三つの意おもつ。

- (21) yúk-čikoykip [→(2)注] (H.) 【雅】

- (22) síyuk [＜si- (ほんとの、大きな) yuk (えもの)] 雄クマ (成獣) ((H.))

注.—この語は、もと、a) ‘エゾタヌキ’や‘シカ’に対して、‘クマ’をさしたらしい——すなわち、yuk<i-uk (えもの)>シカ、moyuk<mo-yuk (ちいさい・えもの)>エゾタヌキ、siyuk<si-yuk (おおきい・えもの)>クマ；b) クマの王、すなわち「ヌブリ・コル・カムイ」[→(12), 注3.]をさす；c) 北海道各地で雄グマ (成獣) をさす；d) ホロベツでは5歳以上の成獣の雄グマをさす；たとえば

hepér 1歳

riyáp 2歳

čisurap 3歳

áska-kučán 4歳雄

kučán 4歳以上の雌

síyuk 5歳以上の雄

- (23) síuk [＜síyuk] (ビロオ、チカブミ)

- (24) hokúyuk [＜hoku (おとこ), yuk (えもの)] 雄グマ (テシオ)

注1.—バチラーは、使用地を示さずに、これを、noyukの反対で人喰いグマだとしている (Batchelor, *Dictionary*, p. 164).

注2.—カラフトの説話の中で雄グマを ukuyux と言う [→(56)]

- (25) okú-yuk [‘男・グマ’] (ビホロ)

注.—並はずれて胴も手足も長いクマ。普通のクマよりも気が荒い。čas-pinnep (走る・雄) とも言う。

- (26) hepér 子グマ；一歳の子グマ (イブリ・ヒダカ)

- (27) epér 子グマ；一歳の子グマ (イシカリ・キタミ・クシロ) cf. ureska-eper 飼つている仔グマ (ビホロ)

- (28) péwrep [＜péwre (わかい・おさない) -p (もの)] 子グマ；一歳の子グマ (H.—ナヨロ、メムロ：S.—トライカ)

注.—eper, heper が日常語として用いられる土地では、pewrep は archaic である。地名にも見出される：Péwrep-us-kot [子グマ・いる・谷] (シリベシ—Nagata, p. 138)；Pewrep-yan-tomari [子グマが・海から上った・泊] (キタミ (ソーヤぐん)—*Ibid*, p. 422)；Pewrep-san-tomari [子グマが・山から下った・とまり] (*Ibid*., p. 422))

- (29) riyáp [＜riya (冬を越す) -p (もの)；‘冬を越したもの’] 二歳の子グマ ((H.))

注.—二歳の子グマをつれている母グマを riyáp-kor-pe [二歳の子グマを・もっている・もの] と言う。これは pó-ka-kewe して——子をかばって——気があらくなっているからとて、アイヌはとく

べつにけい・かいする。

- (30) sīriyap [si- (ほんとの・おおきな)] 三歳グマ 《テシオ》
 (31) čisurap [‘親からはなれたもの’; <súra (はなす), čī-sura (はなれた), -p (もの)] 親から離れた若いグマ 《ホロベツ, ホベツ, ビホロ》

注1. — ホロベツでは3歳のクマをさす。たとえば次のように:

hepér 当歳
 riyáp 2歳
 čisurap 3歳

注2. — ビホロでは2歳グマをさす:

epér 当歳
 čisurap 2歳
 tu-pa-čisurap 3歳
 ré-pa-čisurap 4歳
 yáymat-kamuy 5歳

- (32) kučán 雌熊 (成獣); 4, 5歳以上の雌熊 ((H.: S.))
 (33) áska-kučán 四歳の雄グマ 《ホロベツ》
 (34) riyáp-kor-pe [->(29)注]
 (35) owéwe [<o-we-we; <we-we; <we (クマのほえ声)] 昔話の中でクマを言う 《ビホロ, チカブミ》

注. — owéwe (howewe と) は, クマの泣きごえから, クマを意味する小児語になった。

- (36) nóyuk [<no- (よい) yuk (えもの)] おとなしいよいクマ ((H.))
 (37) wéyyuk [<wen (悪い) yuk (けだもの)] あらぐま ((H.))

注. — トカチ国アシヨロでは toyéranranup と称する性悪の鹿をさすこともある。

- (38) sīrkirappe [sir-kirap-pe (何となく・脂気がなくやせている・もの)] 年とった大きなクマ 《ホロベツ》

注. — poro sīrkirappe su-puta hene a-sir-kamure apkor kane apkas ruwehe an [大きなシリクラッペが鍋のふたでも地面におしつけたように歩いたあとがある] などと言う。

- (39) epénkuwaus (-kamuy) [‘前の方に杖をついているクマ’; <e- (そこ) pen (かみ・上方・上体) kuwá (杖) us (ついている) kamúy (神)] 前足の長いクマ 《ホロベツ, ホベツ, ビホロ》

- (40) epánkuwaus (-kamuy) [‘尻の方に杖をついているクマ’; <e- (そこ) pan (しも・下方・下体) kuwa (杖) us (ついている) kamúy (神)] 後足の長いクマ 《ホロベツ, ホベツ, ビホロ》

注1. — 山本多助著「阿寒の伝説」によれば, アカン地方のクマには四通りあるとゆう:

- a) ‘エペンカウシ’——前足の長いクマ. (epénkaus<e-pen-kuwa-us-kamuy [頭の方に杖をついている神さま])
 b) ‘オパンカウシ’——後足の長いクマ. (opánkaus<o-pan-kuwa-us-kamuy [尻の方に杖をついている神さま])
 c) ‘モユツネ’——ムジナに似たクマ. (moyukne<moyuk-ne-kamuy [ムジナ・状の・神さま])
 d) ‘シツヤシピンネ’——走るに早い雄グマ. (sitsaspinne<si-čas-pinne-kamuy [非常に・走る・雄の・神さま])

注2. — 吉田仁麿著「釧路市の先住民族遺跡」(改訂版, 昭和10年) p. 35によれば, クシロ地方には四通りのクマが住んでいたとゆう:

- a) ‘キムンカムイ’——前足と後足とが同じ長さで頭を下げたクマ；これはアイヌを殺さない。
 b) ‘イペンカムイ’——前足長く首を下げたクマ；これを射そんじた時は山の上の方へ逃げるといふ。(＜e-pen-kuwa-us-kamuy)
 c) ‘イパンカムイ’——前足短く首を下げたクマ；射そんじて追っかけられたら山の下の方へ逃げるといふ。(＜e-pan-kuwa-us-kamuy)
 d) ‘シツヤスピネップ’——前足と後足とが同じ長さで頭を上げたクマ；これはアイヌを殺すから注意しなければならない。(＜si-čas-pinnep「非常に・走る・雄グマ」)
- (41) arásarus クマのばけもの (ホベツ, ホロベツ)
 (42) čičikew 馬の尾のように長い尾をもつとゆう、体が小さく、足が大きく、木の上に登ってもキネズミのように体の自由がきくばけものぐま (ホベツ, ホロベツ)
 (43) otóttous-kamuy [＜o-tóttó-us-kamuy (ちぶさのついている神)] めぐま (ホロベツ)
 (44) suyó-kamuy [＜suy-o-kamuy (穴・にいる・神)] 穴ごもりしているクマ (ホロベツ)
 (45) isó [‘えもの’] クマの一般称 ((S.))
 注1.——この語はもと「えもの」の義であるが、カラフトではクマをさし、チシマではアザラシをさす。
 注2.——カラフトのシラウラでは五歳以上のクマをさす。すなわち：
 péwrex [＜pewre-p わかい・もの] 一歳
 riyáx [＜riya-p 冬を越した・もの] 二歳
 tupá-riyax [＜tu-pa-riya-p 二・季節・冬を越した・もの] 三歳
 repá-riyax [＜re-pa-riya-p 三・季節・冬を越した・もの] 四歳
 isó 五歳以上
 kučán 五歳以上 (めす)
 pinne-iso, pine-iso 五歳以上 (おす)
 注3.——カラフトのタライカでは成長の段階に応じて次のように言う：
 péwrep 一歳
 pón-iso 一歳
 čap, čiyap 二歳
 írpa-čap, írpa-čiyap 二歳
 tupá-čap, tupá-čiyap 三歳
 tepa-čap, tepa-čiyap 四歳
 inepa-čap, inepa-čiyap 五歳
 asisne-pa-čap, asiknepa-čiyap 六歳
 kučán 五六歳以上 (めす)
 pinne-iso 同上 (おす)
- (46) pón-iso [pon 小さい, iso くま] →(45), 注3.
 (47) pinne-iso [pinne おすの, iso くま] →(45), 注2—3.
 (48) péwrep [＜pewre わかい, -p もの] →(45), 注2—3.
 (49) péwrex [＜pewre-p] →(45), 注2.
 (50) riyax [＜riya 越冬する, -p もの] →(45), 注2.
 (51) čiyáp [＜riya-p] →(45), 注3.
 (52) čap [＜čiyap] →(45), 注3.
 (53) kučán→(45), 注2—3.

- (54) sará-kamuy 叙事詩 háwki の中でクマを言う (シラウラ)
- (55) esírasiraxku 昔話 (tu-itax) の中で‘大きなクマ’を言う (S.—アイハマ)
- (56) ukúyux [<hoku-yuk] 説話の中で雄グマを言う (S.—アイハマ・シラウラ)
- (57) yux [<yuk] 説話の中でクマをさす ((S.)) 【→Pilsudski, pp. 162, 212】
- (58) si(y)axka [<si-apka→§24(4)] 説話の中で雄グマをさす ((S.)). 【→Pilsudski, p.189】
- (59) sikúma-noski-un-kamuy [‘山・のまん中・にいる・神’] 叙事詩 (háwki) の中でクマを言う (シラウラ)
Cf. ‘sekuma-noskun-kamuj’ (Pilsudski, p. 231).
- (60) sikúma-pa-us-kamuy [‘山・のかみて・にいらっしゃる・神’] 叙事詩の中でクマを言う (S.—シラウラ)
Cf. ‘sekuma-pa-us-kamuj’ (Pilsudski, pp. 192-3 : Kindaichi, KKI, p. 146).
- (61) ápkas-kamuy [<apkas (歩く) kamúy (神)] 冬が来ても穴に入らずに山野をうろついているクマ (アショロ, ビホロ)
- (62) síarasarus 馬の尾のように長い尾をもつばけものぐま (ホベツ)
- (63) čá-se-weyyuk [<ča (柴) se (負う) wen (悪い) yuk (クマ)] 柴を背負ったような恰好の荒熊 (ホベツ)
- (64) čás-pinnep [<čas (走る) pinnep (雄)] 胴や手足の長い性悪のクマ (ビホロ)
- (65) čiséorosampe [<čise (家) or (中) o (から) san (出た) -pe (もの)] 穴から出たばかりの子グマ (ビホロ)
- (66) huréx [<huré (赤い) -p (もの)] クマの子 (=pon-iso) (=イトイ)
- (67) imút-kamuy [<i (それを [玉飾りをさす]) mut (首から下げている) kamuy (神)] 月の輪のついているクマ (ホロベツ, シラオイ)
- (68) iwór-kor-kamuy [<iwor (山奥を) kor (所有する) kamuy (神)] (ビホロ)
- 【雅】
- (69) iwór-ekasi [<ekási (翁); ‘山の翁’] (ビホロ) 【雅】
- (70) kenási-orun-kamuy [<kenási (川岸の原) or (の中) un (に出て来た) kamúy (神)] 川岸の木原に出て来たクマ (クッシャロ)
- (71) ápkas-kučan [<ápkas (歩く) kučán (雌ぐま)] 他のクマがすでに穴ごもりしたのにまだ山野をうろついている雌グマ (ビホロ)
- (72) kučán-turap [<kučán (雌ぐまを) tura (連れている) -p (もの)] 雌熊を連れている雄熊 (ビホロ)
- (73) matákarip [<mata (冬) kári (うろつく) -p (もの)] 冬になっても穴に入らずにうろついているクマ (サル)
- (74) moyúkne [moyúk-ne-kamuy の下略; <moyuk (ムジナ) ne (のような) kamúy (神)] ムジナに似たクマ (クシロ)
- (75) ónne-kamuy [<onne (老いている) kamúy (神)] 親グマ (pón-kamuy [子グマ] に対して言う) (ビホロ)
- (76) páykar-kamuy [<páykar (春) kamúy (神)] 春さきにとったクマ (ビホロ)
- (77) poróp-netópa [<poró (大きい) -p (もの) netópa (体); ‘大きいものの体’]

その片足だけでも背負いきれぬほどの大きなクマ 《ビホロ》

- (78) poró-siaxka [<poro (大きな) siaxka (大雄熊)] クマの王 《S.—タラントマリ》
- (79) púsinnep [<pu (庫) sinne (のような) -p (もの)] 庫が立ってでもいるように丸くなっているおとなしいクマ 《ビホロ》
- (80) rekútumpe-kor-kamuy [<rekútumpe (首輪) kor (もつ) kamúy (神)] 月の輪をもっているクマ 《ビホロ》
- (81) súy-orun-kamuy [<suy (穴) or (中) un (に)いる) kamúy (神)] 穴ごもりしているクマ 《クッシャロ》
- (82) u-túra-kamuy [<u- (おたがい) tura (連れる) kamúy (神)] 二匹連れのクマ (いつも雄と雄とが連れだっている) 《ビホロ》
- (83) yaymat-kamuy 5歳のクマ 《ビホロ》

§13. あざらし; E. *‘harbor-seal’*; *Phoca vitulis L.*

- (1) tukár アザラシの総称 ((H.))

注。——カラフトでも (tukárタライカ) または tukára ((シラウラ・マオカ)) とゆう語はあるが、それはゴマフアザラシの2, 3歳の仔獣について云う。チシマでは ‘tukoro’ と云ったらしい [→Torii, p. 171: Cf. ‘tkoar’—Klaproth, p. 312.]。

- (2) atúykunkamuy [<atuy-kor-kamuy ‘海を・所有する(支配する)・神’] アザラシの神名 《シラウラ》

- (3) kamúy [‘神’] アザラシの総称 《シラウラ》

注。——この語は北海道及びチシマではクマをさすが、カラフトの東海岸ではアザラシをさし、西海岸ではトドをさす。

- (4) čiráyči [<či-rayeči-p (われら・どっさり殺す・もの)] アザラシの総称 《=イトイ》

- (5) isó [‘えもの’] アザラシをさす ((K.—Torii, pp. 56, 60))

注。——この語は北海道では‘えもの’を云うが、カラフトではクマをさす。

- (6) iámi, iyámi 氷上のアザラシを云う沖ことば。沖狩に出て氷上でアザラシを見付けた時は、kamuy と云わずに i(y)ámi と云う。「タラタ・イアミ・アン」‘tara-ta iami an!’ (あそこにアザラシがいる!) などと云うのである 《シラウラ》

- (7) wórumpe [<wor-un-pe (水・に)いる・もの)] 水中のアザラシを云う沖ことば。沖狩に出てアザラシが海面に頭を出したのを見つけた時 “アザラシがいたぞ!” と云う代りに「ウォルンベ・ヘタリ」‘worumpe hetari!’ (水の者が顔をあげた!) と云うのである 《シラウラ》。

- (8) hetáris [<hetari-p (顔を上げた・もの)] 海面に頭を出したアザラシをさす沖ことば 《シラウラ》。

- (9) sinúye [‘いれすみ’] トカチとヒダカの国境にある霊山(ボロシリ岳?) に於てアザラシを云う山ことば。『…此岳に上る時は海の物の名をいうを禁じ 若呼時は変名して呼也と』(松浦竹四郎『十勝日誌』)。

- (10) poróp [<poro-p (大きい・もの)] アゴヒゲアザラシ (オステンアザラシ) (*Erignathus barbatus nauticus Pallas*) の成獣 《タライカ》。

注。——この地方では年齢の差に応じて次のように別々の名をつけている：

- (a) poróp-amuspe 1 歳
- (b) sinépa-čiyanka 2 歳
- (c) tupá-čiyanka 3 歳
- (d) tepá-čiyanka 4 歳
- (e) poróp 5 歳以上
- (f) pinne-porop 雄の成獣
- (g) mátné-porop 雌の成獣

(11) poróx [<porop] アゴヒゲアザラシの成獣 (シラウラ)

注. —年齢の差に応じて次のように言う:

- (a) irípa-amuspe 1 歳
- (b) riyá-amuspe 2 歳
- (c) riyánga 3, 4 歳
- (d) poróx 成体
- (e) pine-porox 雄の成体
- (f) máxne-porox 雌の成体

(12) amúspe [<? am-us-pe '爪・ついている・もの'] アゴヒゲアザラシの一歳仔 (タライカ) 同一, 二歳の幼獣 (シラウラ)

—参照 'ámúspég' (—Klaproth, p. 312): 'アムシベ' (「しれとこにっし」). 尚, オロッコ語でもアゴヒゲアザラシの当歳の幼獣を amuspe と云う.

(13) irípa-amuspe [<irí (<ir ひとつずきの) -pa (年) -amuspe (アゴヒゲアザラシの幼獣)] アゴヒゲアザラシの当歳仔 (シラウラ)

(14) riyá-amuspe ['越年した・幼獣'] アゴヒゲアザラシの二歳仔 (シラウラ)

(15) riyánka [<riyá (冬を越した) -nka (ギリヤーク語 <pa '獣')] アゴヒゲアザラシの前年春生れた二歳仔 (=イトイ). 同上三, 四歳獣 (シラウラ) [ギリヤークやオロッコも同じ名で呼ぶ]

(16) čiyanka [<riyanka→(15)] アゴヒゲアザラシの二, 三, 四歳のもの (タライカ)

(17) sinépa-čiyanka ['一年・仔'] アゴヒゲアザラシの二歳仔 (タライカ)

(18) tupa-čiyanka ['二年・仔'] アゴヒゲアザラシの三歳獣 (タライカ)

(19) tepá-čiyanka ['三年・仔'] アゴヒゲアザラシの四歳獣 (タライカ)

(20) kīsina アゴヒゲアザラシの成牝の子なきもの (タライカ)

(21) kičina, = kīsina

(22) pákuy ゴマフアザラシ (*Phoca richardii pribilofensis* J. A. Allen) の成体 (タライカ・シラウラ)

注1. —西海岸のタラントマリで páhuy ['pa:huj] と云つたものがある. オロッコ語でもゴマフアザラシの成体を ['pa:uj] と云う.

注2. —タライカでは年齢の差に応じて次のように区別して云う:

- (a) konuspe 生後一カ月位までの幼獣
- (b) pómpe 一歳
- (c) sinépa-čiya-tukar ['一年・越冬した・アザラシ'] 二歳
- (d) tupá-čiya-tukar ['二年・越冬した・アザラシ'] 三歳
- (e) pákuy 四歳以上

注3. —シラウラでは次のように云う:

- (a) konóspe 生後一カ月位までの幼獣
- (b) irípa-pompe 一歳

- (c) riyá-pompe 二歳
 (d) riyá-tukara 三歳
 (e) pákuy 成体
- (23) pómpe [<pon-pe 小さい・もの] ゴマフアザラシの当歳仔《タライカ》；同二，三歳獣《シラウラ》
- (24) irípa-pompe [<irí (<ir ひとつづき) -pa (年) -pompe] ゴマフアザラシの当歳仔《シラウラ》
- (25) riyá-pompe [‘越年した・ゴマフアザラシの仔’] ゴマフアザラシの二歳仔《シラウラ》
- (26) konúspe [<kon-us-pe ‘うぶ毛・ついている・もの’] ゴマフアザラシ及びフィリアザラシの生後一カ月位までの幼獣《タライカ》 cf. うぶ毛が生え代つてしまったものを pónipirux [<pon-ipiru-p 小さい・毛変りした・もの] と言う（＝イトイ）
- (27) konóspe [<konuspe, →(26)] =konuspe 《シラウラ》
- (28) riyá-tukara [‘越年した・アザラシ’] ゴマフアザラシの三歳仔《シラウラ》
- (29) sinépa-čiya-tukar [‘一年・越年した・アザラシ’] ゴマフアザラシの二歳仔《タライカ》
- (30) tupáčiya-tukar [‘二年・越冬した・アザラシ’] ゴマフアザラシの三歳仔《タライカ》
- (31) kónkori フィリアザラシ (*Phoca hispida largha Pallas*) の成体《タライカ》

注. —この地方では次のように区別して云う：

- (a) kónkori-konuspe 当歳仔
 (b) sinépa-čiya-kónkori 二歳
 (c) tupá-čiya-kónkori 三歳
 (d) kónkori 成体 [matá-kamuy ‘冬・アザラシ’ とも言う.]
- (32) ónne-kamuy [‘老大な・神’] フィリアザラシの成体《シラウラ》

注1. —この地方では次のように区別して云う：

- (a) konóspe 生れたばかり（生後一カ月ぐらい）の幼獣
 (b) irípa-onnekamuy 一歳
 (c) riyá-onnekamuy 二歳
 (d) repá-riya-onnekamuy 三歳
 (e) onne-kamuy 成体

注2. —タライカではオットセイを onne-kamuy と呼ぶ。

- (33) kónkori-konuspe →(31), 注(a)
 (34) sinépa-čiya-kónkori →(31), 注(b)
 (35) irípa-onnekamuy →(32), 注(b)
 (36) riyá-onnekamuy →(32), 注(c)
 (37) repá-riya-onnekamuy →(32), 注(d)
 (38) uríkka クラカケアザラシ（リボンアザラシ）(*Histriophoca fasciata Zimmermann*) の成体《タライカ》

注. —この地方では次のように区別して云う：

- (a) uríkka-konuspe 一歳
 (b) sinépa-uríkka 二歳
 (c) tupá-uríkka 三歳

- (d) urikka 成体 [čáxse 又は čáxse-kamuy とも]
- (e) kutó-urikka 雄の成体
- (f) mātne-urikka 雌の成体
- (39) urikka-konuspe →(38), 注(a)
- (40) sinépa-urikka →(38), 注(b)
- (41) tupá-urikka →(38), 注(c)
- (42) kutó-urikka →(38), 注(e)
- (43) mātne-urikka →(38), 注(f)
- (44) uriska [<urikka] クラカケアザラシの成体 (シラウラ)
- 注. —この地方では次のように区別して云う:
- (a) iripa-uriska 当歳
- (b) riyá-uriska 二歳
- (c) repá-riya-uriska 三歳
- (d) uriska 成体
- (45) iripa-uriska →(44), 注(a)
- (46) riyá-uriska →(44), 注(b)
- (47) repá-riya-uriska →(44), 注(c)
- (48) numári [<? numa-riten ‘毛・やわらかな’] ゴマフアザラシ及びフィリアザラシの幼獣 (マオカ) =konuspe [『もしおぐさ』に狸とある]
- (49) iripa-pon-pakuy numari の毛変りした (ipiru) もの (マオカ)
- (50) 以上の他に、北海道に於ても各種について名称を区別していたらしい。古い文献には次のようなさまざまな名称が見える:
- (a) ‘ヘカトロマウシ’ [『しれとこにっし』に ‘又ベケレと云又レタレと云’ とあり, pekér も retár も ‘白い’ とゆう語であるから, これは白色のアザラシである。現に『もしおぐさ』には ‘白ふ’ とあり, 『えぞごせん』にも ‘レタルツカリ’ とゆう語をあげ ‘しらこ’ と注している。ゴマフアザラシの類か?]
- (b) ‘レタルツカリ’ (『もしおぐさ』『えぞごせん』) <retár-tukar [‘白い・アザラシ’] →(a)
- (c) ‘ヘケレ’ (『しれとこにっし』) <pekér-tukar [‘白い・アザラシ’] →(a)
- (d) ‘ヘケッポコマ’ ‘子水豹’ (『もしおぐさ』)
- (e) ‘ホキリ’ ‘またヤイツカリと云’ (『しれとこにっし』) ‘フッキリ’ (『えぞしゅうい』) ‘ボキリ’ (『もしおぐさ』) [『えぞごせん』に ‘ヤイツカリ’ ‘まだら’ とあり, 『もしおぐさ』には ‘毛白く黒ふ’ とある。ゴマフアザラシを云うか?]
- (f) ‘ヤイツカリ’ ‘まだら’ (『えぞごせん』) <yáy-tukar [‘ふつうの・アザラシ’] →(e)
- (g) ‘ケシヨウ’ ‘小字皮’ (『もしおぐさ』) <kes-o [‘斑紋・ついている’] [フィリアザラシ?]
- (h) ‘ニクイ’ (『もしおぐさ』)
- (i) ‘ルラー’ (『もしおぐさ』) ‘ルヲ>’ (『しれとこにっし』) [<ru-o [‘縞・ついている’] クラカケアザラシか?]
- (j) ‘シブイ’ (『しれとこにっし』)
- (k) ‘タシユンブイコロ’ [<tas-un-puy-kor. [‘呼気・の・孔・もつ’ ‘噴気孔を有す’]

る'』]

(1) 'シツカリ' '鼈甲的' (『もしおぐさ』) (『しれとこにっし』に '其品多しといへどもシトカラ (鼈甲皮) を以て第一とし' とある. *si-tukar* は '大きな・アザラシ' の意である. アザラシの仲間で最大形で, かつ皮革が最良のものと云えば, アゴヒゲアザラシであろうか?)

(m) 'ウフイッカリ' (『しれとこにっし』)

§14. セイウチ; E. '*walrus*'; *Odobenus obesus* (*Illiger*)

(1) *sox* (S.—ニイトイ)

§15. トド, キタアシカ; E. '*sea-lion*'; *Eumetopias jubita* (*Schreber*).

(1) *etáspe* a) トドの総称 ((H.)); b) 成体の雄を言う ((S.))

注. —チシマでもこの語は使われたらしい. Cf. 'æhdáspéh' ((Klaproth, p. 312)).

(2) *kamúy* ['神'] トドの総称 (タラントマリ・マオカ)

注. —「カムイ」とだけ言って北海道ではクマをさすが, カラフトの東海岸ではアザラシを, また西海岸ではトドをさす.

(3) *rayámpe* 成体の雌 (タラントマリ・トンナイ)

(4) *popiri* a) 二歳の雄 (cf. *yáy-popiri* 三歳の雄) (タラントマリ・トンナイ); b) 雄を「エタシベ」と言うのに対して雌を「ポピリ」と言う (ニイトイ)

(5) *yáy-popiri* ['普通の・ポピリ'] 三歳の雄 (タラントマリ・トンナイ)

(6) *oáykin(n)ex* トドの類で, くび短く, 顔短く, ブルドックに似て, 額にこぶ状のものを有し, 毛黒く, 皮にひだの多いものを言う (タラントマリ)

注. —*oáyki(n)ne-etáspe* とも云う.

(7) *tonto* (多く [tondo] と発音する) 叙事詩の中でトドを言う (タラントマリ)

(8) *hetáspe* (シャマ=)

§16. オットセイ; E. '*northern fur-seal*' '*sea-bear*'; *Callotaria ursina* (*Linné*)

(1) *ónne-kamuy* [<*ónne* 老大な, *kamuy* 神] (タライカ)

注. —この語はシラウラではフィリアザラシをさす.

(2) *ónnep* [<*ónne-p* '老大な・もの'] (タライカ)

注. —この語は北海道でも行われ, もとは成獣の雄 (E. '*bull*') をさす名称だったらしい. 『もしおぐさ』に, オットセイを 'ウネウ', その雄 'ランネブ', 雌 'ホヲマップ' とあり, 東蝦夷日誌に, オットセイの一種に 'ヲ・ネツブ' と言うものがあって大きき 5 尺ぐらいから 6, 7 尺に及ぶと書いてある. また '老大な・もの' というその語原から見ても, もとは成獣の雄 (いわゆる老犬獣) を言ったものと思われる.

(3) *ónnex* [<*ónnep*] (ニイトイ・シラウラ)

(4) *ónnew* [<*ónnep*] (トンナイ)

注. —この語はワシをもさす.

(5) *unéw* [<*ónnep*]

注. —この語は「オンネブ」から出ている. 「オンネブ」はもと成獣の雄を意味した. それが「オンネッ」となり, 更に「ウネッ」となるに及んで, 意味が分化して雌雄をひっくりめつたオットセイの総称となったらしい. 成獣の雌にも特称があったらしく, 古書に 'ホヲマツブ' 'ホーマップ' などと見えている. これは *po-oma-p* (子・入っているもの) か.

§17. トガリネズミ類 (エゾトガリネズミ・エゾオオトガリネズミ・カラフトオオトガリネ

ズミ・オオアシトガリネズミ・ヒメトガリネズミ等), もぐら; Sorex.

- (1) etúčikerep [<etu (鼻) čí-ke-re (けずれた) -p (もの); '鼻がけずれているもの'] 《レブン》
- (2) etúčikereppo [<etúčikerep-po (指小辞)] 《ムロラン・ホロベツ》
注。——アイヌの中には, 'エドチケレポって何だ?' ときくと, 'ハツカネズミだ' と答える者もある。バチラー (「辞書」139ページ) や永田方正 (「地名解」196ページ) が, この語をハツカネズミとしているのは, たぶんそのためであろう。
- (3) etúčikere [<etúčikerep] 《トカチ・クシロ・キタミ・テシオ・イシカリ》
- (4) mokóčiton 《タラントマリ》
- (5) pón-mokočiton ヒメトガリネズミ 《タラントマリ》
- (6) konóčiton 《トンナイ》

§18. コオモリ類; E. 'bat' 'flutter mouse'

- (1) kapáp [語原ははっきりしないが kap '皮' káp-ne '皮ばかりの・中身の無い' kapár 'うすっぱらな' káppa 'なめし皮' などに関係があるらしい; kap の反復形 kap-ap で '皮の如くうすっぱらなもの' の義であろうか; 或はまた kapár-čikap [→(3)] の中略形ででもであろうか] 《イブリ・ヒダカ・クシロ》
- (2) kapák [<kapap] 《テシオ》
- (3) kapára-čikap [<kapár (うすい) čikap (とり)] 《ネムロ》
注。——アイヌはコオモリを鳥の類に数えたいらしい。アイヌ語では獣の群を topa と言い, 鳥の群を sáy と言い, 魚の群を rup と言って区別する。しかるにコオモリについては鳥と同じく say を使って kapap say ('コオモリの群' Cf. Kindaichi, YNK, p. 582) と言う。
- (4) tóriyanka 《トンナイ》
- (5) kepútenka 《タラントマリ》

§19. うさぎ; E. 'hare'

A. エゾノウサギ *Lepus timidus ainu Barrett-Hamilton.*

- (1) isépo [<i-se-p-po (i (ウサギの悲鳴); i-se ([ウサギが] キイと鳴く) -p (もの) -po (指小辞); 'キイキイ鳴く小さなもの'] 《イブリ・ヒダカ (サル地方) ・トカチ・イシカリ・テシオ》

注1。——クシロ地方の日常語では「イソボ」を使う。しかしもとは「イセボ」であつたらしく, 同地方の地名に「イセボ・ウン・ナイ, (Isépo-un-nay ウサギ・いる・沢) がある (Cf. Nagata, p.343)。

注2。——カラフトのトンナイでも古語として老人はこの語を記憶している。

注3。——「イセボ」は実はもと神名であり, それに対してウサギの普通の呼び名としては「イワンパロ」(<iwan-par-o 六つの・口が・ついている) とゆう語があつたとゆう (ヒダカ [サル地方])

- (2) isópo [<isepo] 《クシロ・キタミ》

注。——これらの地方では普通「カムイ」をつけて「イソボカムイ」[ウサギ・神] と言っている。

- (3) káykuma ['折つて火にくべる木'; kay 折れる kuma 棒] 《ヒダカ [シズナイ・ウラカワ・サマニ・ホロマン]》

注。——この語はもと沖狩の忌詞だったらしい。海上に白波が立つのを各地で「イセボ テレケ」[ウサギがとぶ] と言う。そこで沖で「イセボ」とゆう名を呼ぶとウサギが出て来て海が荒れると考え, つとめて他の語に言いかえることが各地で行われていたのである。「カイクマ」に言いかえたのは波のことを「カイカイ」と言うのでその縁からであろう。

- (4) tukísarus [<tu-kisar-us (二つの・耳が・ついている)] 沖狩の際のいみことば

《シラオイ》

- (5)
- epetke*
- [‘みつくち’; <e (顔)
- petke*
- (裂けている)] 《イブリ》

注。——この語も特種語で、畑に出て「イセボ」という語を使えばウサギが出て来て作物を荒らすので、そこではウサギを呼ぶのに必ず「エベッケ」[みつくち]と呼ぶのだという《ホロベツ》。

- (6)
- iwámparo*
- (1), 注3.

B. カラフトノウサギ (*Lepus gichiganus sachalinensis*)

- (7)
- osúkep*
- [cf. ギリヤーク
- osk*
-] 《タライカ》

- (8)
- osúkex*
- [<
- osukep*
-] 《シラウラ・アイハマ・トンナイ・タラントマリ》

- (9)
- isépo*
- [→(1)] →(1)注2.

- (10)
- rikúinkamuy*
- [<
- rik*
- (上)
- un*
- (に)
- in*
- (いる)
- kamuy*
- (神)] ウサギが神になれば言う
-
- 《シラウラ》

注。——ふつうはジャコオシカを云う。→§26(3).

§20. ねずみ ; ‘rat’

- (1)
- érum*
- ((H.——全域 ; S.——チライ))

注。——アクセントは不明だがチシマでもこの語を用いた。Cf ‘*erum*’——Toii, p. 115 ; ‘*ärmüh*’——Klaproth, p. 309.

- (2)
- erúm*
- 《タライカ・ニイトイ・シラウラ・アイハマ・トンナイ》

- (3)
- enúm*
- 《タラントマリ》

- (4)
- erém*
- 《チトセ》

- (5)
- erúmum*
- 《ビホロ・ハルトリ・シラヌカ》

——参照 ‘*エリムン*’《蝦夷拾遺》

- (6)
- toyérum*
- [<
- toy*
- (土)
- erum*
- (ネズミ)] シチロオネズミ (ドブネズミ) (
- Rattus norvegicus norvegicus Erxleben*
-) 《ホロベツ・シラオイ・クッシャロ》

- (7)
- sítoyerum*
- [<
- si-toy-erum*
- (大・土・ネズミ)] シチロオネズミ 《テシオ》

- (8)
- húre-erum*
- [‘赤い・ネズミ’] エゾアカネズミ (
- Apodemus speciosus ainu Temminck*
-) 《テシオ》

- (9)
- irúra-erum*
- [<
- i-rura-erum*
- (ものを・はこぶ・ネズミ)] エゾアカネズミ 《テシオ》

- (10)
- harú-kar-pe*
- [‘食糧を・あつめる・もの’] エゾアカネズミ 《クッシャロ》

- (11)
- niókuy*
- [<
- ni*
- (木)
- o*
- (尻)
- kuy*
- (かじる)] エゾヤチネズミ (ベツトホウドネズミ) (
- Clethrionomys rufocanus bedfordiae Thomas*
-) 《クッシャロ》

- (12)
- niyókuy*
- [<
- ni-o-kuy*
-] エゾヤチネズミ 《チカブミ》

- (13)
- oníkuy*
- [<
- ni-o-kuy*
- (木・尻・かじる) の音位転倒] エゾヤチネズミ 《テシオ》

- (14)
- yukérum*
- [<
- i-uk-erum*
- (もの・とる・ネズミ)] ハツカネズミ (
- Mus molossinus molossinus Temminck & Schlegel*
-) か 《ホロベツ》

§21. リス, きねずみ ; E. ‘squirrel’

A. エゾリス (*Sciurus vulgaris orientalis Thomas.*)

- (1)
- tusúinke*
- [<
- tusú*
- (巫術)
- ninke*
- (消す); ‘巫術を使って姿を消すもの’の義か]
-
- 《ホロベツ・シラオイ・チトセ・チカブミ・テシオ》

- (2)
- tusúnika*
- 《レブン》

- (3) tusúnike (サル, ホベツ)
 (4) níow (ビホロ, ハルトリ)
 (5) níyow (クッシャロ)
 (6) níuweo (シズナイ, シヤマニ, アシヨロ, シラヌカ)
 (7) iwóttusukur [<iwor- tusu-kur (山の・巫術を行う・神)] (ビホロ)
 (8) wémpe [<wen-pe (悪い・もの)] (アシヨロ)

注. —これは木の上において人を拝んでいるさまが、いかにも貧乏くさく不吉とされ、狩人が朝出がけにこれを見かけるとその日はだめだといって家へ戻る。

B. カラフトリス (*Sciurus vulgaris rupestris*)

- (9) róxse, rósse (シラウラ, タラントマリ)

§22. シマリス, しまねすみ ; E. 'striped squirrel' 'chipmuck' 'chipmunk' ; *Eutamias asiaticus lineatus Temminck*

- (1) kasiikirkus [<kasi-ikir-kus (その上に・線・通っている) ; 'その背面に縞が通っているもの'] (ホロベツ, レブン)
 (2) kasékurkur [<kasi-ikir-kor-kur (その上に・線を・もつ・神)] (アシヨロ, ハルトリ)
 (3) kasíkurukuru (シラヌカ)
 (4) kasúikurukuru (クッシャロ)
 (5) káspekurkur (ビホロ)
 (6) nisúykurukuru [<ni-suy-kor-kur (木・穴・もつ・神)] (クッシャロ)
 (7) ruó-čironnup [<ru-o-čironnup (縞・ついている・けだもの)] (チトセ, チカブミ, テシオ)
 (8) setúnrox [<setur-ru-o-p (背に・縞・ついている・者)] (シラウラ)
 (9) wénkok [<wen-kok (悪い・奴)] (アシヨロ)
 (10) atátnike (テシオ, ハルトリ)
 (11) atátnika (タライカ)

§23. エゾモモンガ, ばんどり ; 'flying squirrel' ; *Sciuropterus russicus orii (Kuroda)*

- (1) at ((H.))

注1. —よく日常の会話では át-kamuy と丁寧な呼び方をする (ホロベツ, クッシャロ)。

注2. —日常会話では指小辞 -po をつけて átpo と言うことも多い。

- (2) hat (テシオ)

- (3) ax [<at] (S. タラントマリ)

注. —カラフトではカラフトモモンガ (*Sciuropterus russicus athene*).

§24. シカ : E. 'deer' ; *Sika nippon nippon (Temminck)*.

- (1) yuk [→§12(2)注] ((H.))

注1. —この語は、いま、もっぱらシカの意に用いられるが、もとはもっと意味がひろく、狩のえもの中でその肉が食料として重要であったクマ・シカ・エゾタヌキ等のどれをもさす名称であった [→§12(2)注]。

注2. —チシマでもシカを yuk とよんだらしい (→Torii, p. 150).

注3. —yuk は総称だが、年齢や性別に応じた特別の名称もある。たとえばアシヨロでは次のように言う：

póy-yuk 1 歳
 riyá-poy-yuk 2 歳の雌
 riyáw 2 歳の雄
 tu-pá-riya-yuk 3 歳
 pinneraw 3 歳の雄
 momámpe 3 歳以上の雌
 re-pá-pon-apka 4 歳の雄
 apka 5 歳以上の雄

またビホロでは次のように云う：

póy-yuk 1 歳
 riyáw 2 歳
 reháwnep 3 歳の雄
 áпка 4 歳の雄
 sí-apka 5 歳以上の雄
 momámpe 3 歳以上の雌

- (2) yuk-čikoykip [→§12, (2)] ((H.)) 【雅】
 (3) áпка 成体の雄 ((H.))
 (4) sí(y)apka [si- は ‘大なる’ の意] 老大なる雄鹿 ((H.))
 (5) momámpe- 成体の雌 ((H.))
 (6) póyyuk [<pon (小さい) yuk (シカ)] シカの子 ((H.))
 注。——nokán-yuk とも言う《ホロベツ》
 (7) pónnumakirawkorpe [<pon (小さい) numá (毛) kiraw (つの) kor (もつ) -pe (もの)] つのの生えかけた2才の雄 《クッシャロ》
 (8) sukénetkorpe [<suke-nit (鍋をつるすかぎ) kor (もつ) -pe (もの)] 3才の雄 (つのが二又になっていて鍋をつるすかぎみたいになっているからこの名がある) 《クッシャロ》
 (9) pinneraw [<pinne (雄の) re-aw (三つ・又)] 若い雄鹿 ((H.))
 (10) riyaw [<riya-p (越年した・もの)] 2才の雄 《アショロ》
 (11) reháwnep [<re-aw-ne-p (三つ・また・になっている・もの)] 3才の雄鹿 (=pinneraw) 《ビホロ》
 (12) toyéranranup シカ的一种 (つのが大きく、その先端がへら状になっていて、気が荒く、犬をも殺す) 《アショロ、ビホロ》
 (13) máturmip [<mat-ur-mi-p (女・衣・着ている・もの)] 雄でありながら皮に雌鹿のそれのような模様のついているシカ 《ビホロ》
 (14) okúrmip [<oku-ur-mi-p (男・衣・着てる・もの)] 雌鹿でありながらその皮に雄鹿のそれのような模様のついているもの 《ビホロ》

補注。——チシマではロシア語をとってシカを ‘oren’ ともしんだらしい (Torii, p. 150).

§25. トナカイ ; E. ‘reindeer’ ; Rangifer tarandus sibiricus (Schreber)

- (1) tunákay 成獣 ((S.))
 (2) tunáxkay 成獣 《シラウラ》
 (3) irípa-tunaxkay [‘一年・トナカイ’] 当歳のトナカイ 《シラウラ》
 (4) riyápo [<riyá (越冬した) po (子)] 二才のシカ 《シラウラ》
 (5) ‘donötäh’——Klaproth, p. 311.

§26. ジャコオジカ ; E. 'musk-deer' ; Moschus moschiferus L.

- (1) opókay ((S.))
- (2) rikín-kamuy [<rikun 高所 (天国) にいる, kamuy 神] 神名 《シラウラ》
- (3) rikun-kamuy [<rik-un-kamuy (高み・に・いる・神)] 《トンナイ》 【神名】

§27. ウシ ; E. 'bull, cow, ox' ; Bos taurus Linné, var. domesticus Gmelin.

- (1) pekó [<Jap. beko] (H.)
- (2) 'sukodena' [<Russ. skotina] ((K.—Torii, p. 115))

§28. ウマ ; 'horse' ; Equus caballus L., var. orientalis Noack.

- (1) úmma [<Jap. uma] ((H. : S.))
- (2) úma [<umma] ((S.))
- (3) čóme [<Jap. jōme] よい馬 (乗馬) 《ホロベツ》
- (4) čómen [<čóme] 《クシロ》
- (5) 'rosot' [<Russ. lošad' [lɔʃət']] ((K.—Torii, p. 115))

§29. いるか ; 'dolphin' (including several species)

- (1) tánnu(y) 《イブリ》

注1.—ホロベツでは tánnu とよぶ人もいる。

注2.—ホロベツでは 'いるか' に次の三種を区別している : a) tánnu イルカ (Delphinus dussumieri Blanford), b) tuwayuk ねずみいるか (同定未詳), c) nisáparo ; nusáparo (同定未詳)。

- (2) térke-čironnup [<térke (とぶ) čironnup (けもの)] イルカ (方言 'せんびきゆりか') 《フシロ》

注.—'もしおぐ' に「テレケチロンノブ」とある。

- (3) térkep [<terke-p (とぶ・もの)] 《シラヌカ, ソラチ》
- (4) tánnup 《レブン》
- (5) kóyka-isepo [<koy (波) ka (上) isepo (兎)] 《ソラチ》
- (6) tuwáyuk, tuwáyuyuk [<tuwá (とぶ) yuk (えもの) : 民間語原説として, イルカが波間に群れ跳ぶさまを鹿群の跳躍になぞらえて, tuwayuk <tu-way-yuk <tu-wan-yuk '数・十の・鹿' の義に解する者もある] 《イブリ・ヒダカ》

注.—ホロベツ・シラオイの漁夫の方言では 'ねずみゆりか' と称する。ネズミイルカ (Phocaena phocaena L.) か。バチラーの辞書には "カマイルカ, A kind of dolphin. Lagenarhynchus acutus Gray" とある。

- (7) nisáparo, nusáparo 同定未詳 《ムロラン・ホロベツ・シラオイ》

注.—吻端がスパッと切断したようになっているものだとゆう。イルカではなく, マッコオクジラだと言う者もある。

- (8) nunókončikor 上に同じ 《レブン》
- (9) okóm ゴンドオクジラ 《ホロベツ》

注.—バチラーの辞書に "a dolphin" とあり, 同意語として 'rokom' 'tannu' をあげている。また 'pon-humbe' ['小さな・クジラ' の義] をあげて "the porpoise" としている。

- (10) rokóm = okom 《アベシリ》
- (11) móni-humpe シロイルカ (Delphinaptera leucus) 方言 'しろくじら' ((S.))

§30. サカマタ, シャチ ; E. 'killer whale' ; Orcinus orca (Linné)

- (1) repúnkamuy [<rep (沖) un (に・いる) kamuy (神)] ((H. : S.))

- (2) réptakamuy [<rep-ta-kamuy (沖・の・神)] 《もしおぐさ》
- (3) repórunkamuy [<rep-or-un-kamuy (沖・中・に・いる・神)] 《シラウラ》
- (4) repóruntakamuy [<rep-or-un-ta-kamuy (沖に・いる・神)] 《タラントマリ》
- (5) atúykorokamuy [<atúy-kor-kamuy (海を・支配する・神)] 《シラウラ》
- 注。——亀をも atuy-kor-kamuy または atuy-kor-ekasi と云う《ヒダカ》
- (6) tomárikorokamuy [<tomari-kor-kamuy (入江を・支配する・神)] 《タラントマリ》
- (7) číohayaku [<či-ohaya-kur (われらが・おそれる・神)] 《(S.)》
- (8) kamúyčis [<kamuy-čip (神・舟)] 《(S.)》
- (9) kamúyhumpe [<kamuy-humpe (神・クジラ)] 《イブリ・ヒダカ》
- (10) ikóykihumpe [<i-koyki-humpe (物を・とる・クジラ)] 《レブン》
- (11) tomínkarkur [<tomi (宝物) inkar (見る) -kur (神)] 《ホロベツ》
- (12) kamúinkarkur [<kamuy (神) inkar (見る) -kur (神)] 《ホロベツ》
- (13) isóyankekur [<iso-yanke-kur (海さち [クジラ] を・浜へ上げる・神)] 《ホロベツ》
- (14) kamúyrametok [<kamuy-rametok (神なる・勇者)]
- 注。——祈詞や神謡の中では(11)から(14)までを連ねて“トミンカルクル・カムインカルクル・イソヤンケクル・カムイラメトク”と称えることもある。
- (15) móhačankur [<mo-ačane-kur (小さな・頭目である・神)] シャチ神を兄弟二柱の神と考え、その弟神をさして云う 《レブン》
- 注。——Cf. ‘モアシャンクル’「鯨の大なるもの」《もしおぐさ》
- (16) sihačankur [<si-ačane-kur (大きな・頭目である・神)] シャチ神を兄弟二柱と考え、その兄神をさして云う 《レブン》
- Cf. ‘シアシャンクル’ 鯨の大なるもの《もしおぐさ》
- (17) imónkanukarkur [<i-mon-ka-nukar-kur (われらの・手・の上を・見そなわす・神)] 《レブン》
- (18) kamúyottena [<kamuy-ottena (神なる・頭目)] 《レブン》
- 注。——祈詞の中では(15)(16)(17)(18)を連ねて“モハチャンクル・シハチャンクル・イモンカヌカルクル・カムヨッテナ”と称える。
- (19) ikóyki-kamuy [<i-kóyki-kamuy (それ [= 鯨] を・いじめる・神)] 《オシヤマンベ》

§31. くじら E. ‘whale’

- (1) húmpe クジラの総称 《(S.)》
- 注。——♂ を óxka-humpe, ♀ を máxne-humpe と称する《タラントマリ》
- (2) úmpe = humpe 《シヤマニ, ネムロ》
- (3) ‘rika’ = humpe 《(K.——Torii, p.151)》
- 注。——北海道・樺太で rika と云えば鯨の白肉(皮下脂肪層)を云う。
- (4) héyse [<héy-se (呼吸する)] 山の中で humpe とゆう語をさけて云う 《トカチ。——松浦竹四郎『十勝日誌』》
- (5) nokór-humpe [<no (? <nu 豊漁) hor (もつ・支配する) humpe (クジラ)] 小イワシクジラ 《(H.)》
- 注。——‘もしおぐさ’に‘ノコル’‘髭の好き’とある。

- (6) sinokor-humpe [$\langle$ si- (真の・大なる) nokor-humpe (小イワシクジラ)] イワシクジラ [*Balaenoptera borealis Lesson.*] ((H.))
- (7) oáspeus-humpe [$\langle$ o-aspe-us-humpe (尻の方に・背びれの・ついている・クジラ)] ナガスクジラ [*Balaenoptera physalus (Linné)*] 《イブリ》
- 注。——“もしおぐさ”に、アシベコル’ [aspe-kor ‘背びれ・もつ’] とあるのもこれか。
- (8) kúttar-humpe ナガスクジラの類 ((H.))
- (9) kúxtarumpe [$\langle$ kuttar-humpe] 《マオカ、シラウラ》
- (10) hútarumpe [$\langle$ kuttar-humpe] 《タラントマリ》
- (11) okékus-humpe [$\langle$ o-ke-kus-humpe (尻から・油・出る・クジラ) ; $\langle$ okekus-humpe (下痢する・クジラ) ; このクジラは味がよいので食べすぎて下痢するのでこう呼ぶと] ナガスクジラの類 《レブン、オシャマンベ》
- (12) okirike-humpe [‘下痢する・クジラ’の義] ナガスクジラの類 (S.)
- (13) osákanke-humpe [‘さわぐ・クジラ’の義] コクジラ *Rhachianectes glaucus Cope.* 《レブン》
- (14) otápoye-humpe [$\langle$ ota-poye-humpe (砂を・かきまぜる・クジラ)] = osakanke-humpe ((H.))
- 注。——otápoyep と云う《ホロベツ》。“もしおぐさ”に‘ヲタホイ’とあるもの。
- (15) ipóye [$\langle$ i-poye-p (もの・かきまぜる・の)] = otapoye-humpe ((S.))
- (16) yáki-humpe [‘セミ・クジラ’; 蟬のそれに似た頭部をもっているのだから云うと] マッコウクジラ *Physeter macrocephalus Linné.* 《レブン》
- (17) nisé-humpe 同定未詳 ((S.))
- Cf. ‘ニセフンベ’ めさもちと云う《もしおぐさ》。
- (18) kené-humpe 同定未詳 ((S.))
- Cf. ‘ケネフンベ’ 皮赤き《もしおぐさ》。cf. also ‘フーレンベ’ 油赤き《もしおぐさ》。
- (19) repún-ekasi [‘沖の・翁’] 昔話の中で云う 《ホロベツ》
- (20) písotki クジラの沖詞 《ホロベツ》
- (21) okína [? $\langle$ Jap. 翁] クジラのばけもの ((H.))
- (22) siyókina [$\langle$ si-okina 大・オキナ] クジラの大・ばけもの 《ホロベツ》
- 注。——海中に大魚ありオキナと云う由、古くから『北海随筆』その他の諸書にみえている。オキナおよびシヨキナなる語は今も伝えていて、巨鯨の幼を經たものと考えられている。参照‘ヲキナ’鯨の大なるもの《もしおぐさ》。シヨキナが水面に浮んで口を開ければ、上あごは天空にすれすれに、下あごは海底にすれすれに、海上を往来する舟を人もろとも呑んでしまう。また鯨までも丸呑みにするので、ときおり海上をたくさんの鯨が乱れ走るのは、これに追われて逃げるのであるとゆう ((cf. Chiri, AMK, I, p. 35 ; Kindaichi, 探訪隨筆, p. 136)).
- (23) etúčikerep-humpe [etúčikerep→§17, (1)] 同定未詳 《ホロベツ》
- 参照‘イツチケレ’ 鼻長し《もしおぐさ》
- (24) áspepuyo [$\langle$ aspe (背びれ) puy (穴) o (ついている)] 《ホベツ》

注。——鼻の上に米とぎ桶ほどもある大きな口のあるクジラだとう。創造神コタンカルカムイがシコツ湖をつくったとき、あんまり深くて罌丸をぬらした。おれは海の中を歩くときだって膝から上をぬらしたことがないのに、と怒って、そこにいたイト魚をつかまえて親指で頭を強くおさえて海へ投げたら、それがこのクジラになったとう伝説がある。

補注。——以上の他にも、いろいろ名称があつたらしく、たとえば『もしおぐさ』には、なお次のような語が見えている：

- a) ‘イショボンベ’。[isopo-humpe なら「ウサギクジラ」の義だ。‘白く兎のごとし’と注してあるのを見ると、シロナガスクジラか、あるいはシロイルカだろう。]
- b) ‘ツ・ナイ’。[tunáy は褶のことだ。‘腹にうねあり’と注してあるのを見ると、ナガスクジラ族らしく思われる。ビホロでクジラの古語に tunáy とゆう語があり地名などにも出てくる。]
- c) ‘イワコトラマフンベ’。[‘大なるもの’と注してある。]
- d) ‘ヤイテミ’。[‘腹に筋あり’と注してある。]
- e) ‘ユクランベ’。[‘腹に足のごときあり’と注してある。]
- f) ‘タンネイベ’。[tánne-ipe は「長い・魚」の義・‘長くして髭多き’と注してある。]